

いわて鳥獣保護センター通信



鳥獣保護センターには季節によって様々な鳥獣が保護・搬入されてきます。春から夏には上手く巣立ちができず動けなくなったヒナやカラス等に襲われてケガをした幼鳥、夏には海外から渡ってきた夏鳥のヒナや幼鳥が発見保護されます。夏が終わり、紅葉が始まるまで期間は、幼鳥類が保護される数はかなり少なくなりますが、秋から次の年の春にかけては渡鳥の季節となり、高圧電線に接触したり衰弱して飛べないという通報でオオハクチョウが保護されることが増えます。

令和4年度は、他県において高病原性鳥インフルエンザで死亡した野鳥が例年より早く9月下旬に報告され、その後、各地で次々と野鳥の死亡報告が発表されました、さらには大規模養鶏場において高病原性鳥インフルエンザで死亡した鶏が見つかり、大量の鶏が処分されるニュースが後を絶ちません。

野鳥の中には感染しても発症しない個体があることが知られており、鳥獣保護センターにおいても冬

期間はウイルスが施設内に持ち込まれないよう、受入時からしっかりと検査を実施し、国の機関にもその都度、遺伝子検査用の検体を送り、その結果が陰性と証明されるまで、専用の隔離施設の中で一羽ごとに区切って診察・治療・保育を行っています。また、検査の結果陰性で治療が終わった個体で放鳥できない個体は、スズメやネズミと接触するがないよう屋内の施設に収容・管理する等、鳥インフルエンザ感染防止対策を実施しています。

鳥獣保護センターでは、鳥類の他にもいろいろな種類の野鳥、動物が保護されます。動物の中で保護されることが多いのはカモシカで、年間では保護されるのは平均で5頭程度です。教育委員会により持ちこまれる個体の中には四肢の蹄周囲、口唇の辺りに腫瘍のような結節が発生したパラポックスに感染している個体もあります。

ヒトの世界と同様に、野生鳥獣の世界も感染症対策が重要課題です。



センターお仕事日記



今回のセンターお仕事日記は、ボランティアの皆さんと行った活動をご紹介したいと思います。

鳥獣保護センターは獣医師2名と獣医師のサポートを行う職員2名がおり、通常はそれぞれ1名ずつ勤務し2名体制で業務にあたっています。しかし、保護した鳥獣の数が増加した場合や、施設修繕を行う場合、さらには草刈りや除雪など季節ごとの作業によっては職員だけでは手が足りない時があります。

そういった時は、鳥獣保護センターのボランティアとして登録されている方の力を借りています。



2

今年度は嬉しいことに、春から新たに3名の学生さんにボランティアへ参加して頂きました。若い力は本当にありがたく、負けてられないなど刺激になります。



そこで早速、センターで行う保護動物への給餌や施設清掃などの確認、そして新旧ボランティアさんを職員の顔合わせも兼ねて、数年行なうことができな

かつた処置室と事務室の大掃除を行いました。おかげさまで、行き届いていなかった場所の清掃ができ、整理整頓され処置室と事務室で気持ちよく勤務できるようになりました。



当日は、清掃の他にコウモリに詳しいボランティアさんがヒナコウモリへの給餌を行い、普段経験することのないその様子に興味津々な学生さんと、そこにセンター職員も加わり、質問や意見交換などを行い、ボランティアさんから「貴重な体験ができた時間でした。ありがとうございました。」と和気あいあいと良い活動ができました。



この他にも、今年は、センター職員が流行り病に罹ってしまった時にも快くサポートして頂きありがとうございました。

登録いただいているボランティアの皆様は本当にありがたい存在です。冬季間は感染症予防のため活動を控えていますが、引き続き、サポートよろしくお願いします。



令和5年2月1日発行

放鳥で思うこと

【オオハクチョウ】

わたしが初めて放鳥に関わったのは約三年前のことです。

その日は天気も良く、初冬の水辺は穏やかで、遠くにハクチョウの群れが見えます。まさに放鳥日和です。

段ボール箱の蓋を開けるとオオハクチョウはすぐに水に入りました。そして今度は私たちの方に向きを変えて私たちを見ています。

ほんの一瞬の出来事でしたが、それは別れの挨拶のようでもあり、感謝の表現のようでもあります。そして、オオハクチョウは群れの方に飛んでいきました。

私にとって感慨深い思い出です。



【チョウゲンボウ】

怪我をしてセンターに持ち込まれる鳥獣を自然に帰すことは正直難しい事が多いですが、幼くして保護された鳥獣を自然に返す割合が多いと感じています。ただし、幼鳥は放鳥できるまで育てることは大変で、給餌間隔が短い場合は夜中に給餌しなければならず家に持ち帰ることもあります。

このチョウゲンボウの幼鳥は自分で餌を食べられなかつたので強制給餌もしなければなりませんでした。

そして、手を掛けて育てたチョウゲンボウもいつかは放鳥の時がきます。段ボール箱に入れて車で運び、林の中で放鳥するのですが、車を走らせている

時「姥捨て山に向かっているのではないか?」と思うのは私だけでしょうか。

チョウゲンボウは猛禽類の中でも体は小さく天敵も多い事でしょう。

放鳥して、すぐに他の鳥獣に襲われはしないか、何事も無く生き延びられるだろうかと心配になります。



【コノハズク】

二羽のコノハズクも、幼鳥の時から約2ヶ月間世話をし、放鳥の時を迎えるました。できるだけ保護された場所の近くで放鳥しようと、車で一時間半ほど走りました。

二羽のコノハズクは無事に同じ方向に飛んで行きましたが、やはり心配になります。チョウゲンボウよりさらに小さいコノハズクです。このまま何かの餌になりはしないか、集団に戻って渡りが出来るだろうか心配です。

オオハクチョウを離から世話をすることはほとんどありませんし、天敵も少ないのでそれほど心配はしませんが、世話をする時間が長かったり、食物連鎖の底辺にある種ほど心配になります。チョウゲンボウ、コノハズク、そして今まで放鳥したたくさんの鳥たちはどうなったのだろう。自然の厳しさ、自然の摂理は自分なりに納得はしていますが、やはり心配です。



【経過】

ピンニング整復術

【経過】

9月4日、9:30、花巻市内の水路で動けなくなっていた個体を住民が保護

9月5日、9:00、花巻保健福祉環境センターに持ち込み保護、同日16:30放鳥試みるも飛翔せず。

9月6日、鳥獣保護センターに搬入。

【所見】成鳥、体重554g、削瘦、外傷：無、擦過傷：無、出血：無、脱毛：無、骨折：無、元気：有、起立：可、

【治療】レスチオニン0.8ml、アリナミン0.8ml皮下注射、プレドニゾロン0.08ml、メタカルム0.02ml筋肉注射

【給餌】ヒヨコ2羽を置餌完食（以降継続給餌）

9月7日、左翼下垂、レントゲンにて左上腕骨骨折を確認（図1）

9月8日、ピンニング固定術（φ0.9×77mm）を施術、露出ピンをエポキシパテで保護、左翼を体部にテーピング固定、アンピシリンナトリウム5mg皮下注射（以降5日間継続）、運動制限のためやや狭い段ボール箱にて飼育

9月12日、体重673g

9月15日、レントゲン（図2）骨化は認められない。抜糸、縫合面はきれい、テープで再固定。

9月24日、レントゲンにて軽度骨化を確認、テープ除去、段ボール箱から小ケージ（縦370×横180×最上部300cm）に移動

9月25日、ゲージの一番上部の止まり木にいることを確認

9月29日、体重770g、レントゲンで接合部の骨化進展を確認（図3）、ピン除去

10月6日、体重686g、レントゲンで接合部が太く骨化していることを確認し中ケージ（縦700×横360×最上部257cm）に移動、飛翔可能

10月12日、飛翔問題なし

10月20日、屋外訓練施設（縦1080×横1530×高さ380cm）に移動、飛翔可能

10月29日、屋外訓練施設からソフトリリース、ヒヨコ1羽置いてリリース確認

【今回の成功例の良かった点】

- ・開放及び単純骨折であったこと
- ・露出ピンをエポキシパテにて保護したこと
→他報告によるとピンの脱落し恐らく鳥自身が引き抜くことが考えられた。
- ・3週間でピンを除去したこと
→固定した場合、関節のリハビリテーションが困難、経験から鳥類は骨化が早いと考えられる。

